

## 身体化された学歴意識と実践

黄 順姫  
(筑波大学教授)

今回の教員調査では、小学校教育段階から学力の格差が存在し、入学当時から子どもの間に格差が存在すると考える教員が約2割はいる。入学前から早期教育をさせる家族環境にいる子どもが、英語、理科、音楽などで有利になり、学歴競争に有利になっているのであろう。

現代のように激変する社会や、新型コロナ、戦争などで全世界の連動する経済状況の中では、上・中流階層の親は、子どものできるだけ早い段階から教育して、持続的に方策を講じて対処していかなければならないと考えられている。

競争の期間の長期化、目標への計画、実行、達成の価値がより高くなっている。子どもは、長期間のこのような価値、考え方を身につけて生きていくことになる。

特に、現代の高齢化社会、世界的な経済変動、社会変動に伴って、一生仕事を優先して生きて、ようやく定年退職になっても、「生涯現役」の言葉が価値を持つようになる。

結局、退職して趣味や奉仕生活で優雅に暮らせる余裕のある層の人々でさえ、残りの人生を遊びや趣味、奉仕だけで過ごすことに違和感を覚え、焦りを感じるようになる。

退職後も、「生涯現役」という価値と目標に向けて、経済的に余裕のある層の人々でさえ、なにか仕事をしなければならない、そのために退職する前から計画を立て、準備をしないとけないという精神的な不安、焦りを感じるようになる。企業で働いた人は退職の前から、定年後の新しい仕事を探すために必要な免許を取っていく。たとえば、韓国では不動産仲介の資格をとるために、私立の塾に通う人も多い。また、老人のケアをする社会福祉の資格をとる。定年前の中高年は私立の塾に行き講義を聞き、免許獲得のための競争に参加している。

彼らは人生の早い段階から、「学歴社会」のため塾に通い高学歴という免状をとるために競争し、定年退職前は再び「生涯現役」のために、再び塾に通い新しい免状を得るために競争するのである。

したがって、学歴社会で生まれ育った人々は、生涯、その社会に制度化されているシステムから逸脱することができず、むしろ学歴社会で身体化した価値観、考え方で一生を過ごさざるをえない意識及び無意識の性向を持つようになる。

学歴社会の中で敷かれたレールから降りてもよいとされる定年退職という制度があっても、なお、そのレールから降りられず、定年退職後の仕事のために不安になり、なにかの免状を獲得するために、再び学歴社会の競争に自ら入ってしまうことになる。

これは我々が学歴社会、そのための教育システムに飼いならされた身体を持つがゆえに生じる、新たな社会現象であり、だれもが気づかないで、個人の事情、不安に還元されてしまうのである。

もはや、学歴社会は、有名大学をはじめに序列化された学校システムに通る中等教育、高等教育の子どもの問題だけではなく、仕事に従事している中年齢、退職していく高年齢の問題にまで範囲が広がっている。さらには、生まれてまだ小学校にも入っていない幼稚園の園児までもが巻き込まれることになっていく。現代は、学歴社会の意識と実践を再度問わなければならない時代である。